

新著聞集

五

新著聞集



奇怪篇第十

病床了猫来り

伽藍滅没す

四子で同産す

山伏夢に入子成す

化生夢に入る

猫妖て女くゑる

薄了稲の穂を生す

祖母孫を噉ふ

妖猫友と誘ふ

異形の赤子

炬切名劔

形を體なき妖者

出鬼勘定

壯士童を引て公に



婆^ば妖^{まじ}呼^よ上^う事^{こと}ももも成^{なり}丁^{てい}

火^{くわ}車^{くるま}はまろてて腰^{こし}脚^{あし}爛^やき壊^{こわ}る

人^{ひと}活^{いき}なり柳^{やなぎ}とふれ三^{さん}子^こと同^{どう}産^う丁^{てい}

多^{おほ}岐^ぎ新^{あらた}院^{いん}天^{てん}狗^く僕^{ぼく}とふ

真^ま名^な古^{ふる}村^{むら}蛇^{へび}孫^{そん}髪^{かみ}粘^ねる

葬^{そう}処^{ところ}雲^{うん}中^{ちゆう}乃^の鬼^{おに}の如^{ごと}き

夜^や陰^{かげ}茶^{ちや}亭^{てい}兩^{りやう}首^{くび}出^で没^{ぼつ}

灰^{はい}骸^{がい}雲^{うん}入^い合^あ兩^{りやう}足^{あし}垂^た出^です

茶^{ちや}店^{てん}の水^{みづ}碇^{いかり}着^きれ面^{おもて}と現^{あら}す

熊^{くま}野^の巖^{いん}洞^{どう}大^{だい}船^{せん}久^くく棲^す

蛇^{へび}囊^{ふくろ}人^{ひと}の海^{うみ}中^{ちゆう}懷^{いだ}胎^{たい}始^{はじ}て知^しる

吳^い形^{ぎやう}乃^の二^に子^こ同^{どう}産^う丁^{てい}

二^に蛇^{へび}頸^{くび}とゆひ人^{ひと}家^か割^わる囊^{ふくろ}す

古^{ふる}狼^{ろう}婦^ふとわうて子^こ孫^{そん}毛^けと被^{おほ}る

面^{おもて}見^み火^か車^{くるま}幽^{ゆう}冥^{めい}袖^{そで}とひ

僧^{そう}尸^し肉^{にく}と噉^{くは}ふ土^ど家^か内^{うち}と墮^お

和^わ泉^{せん}小^こ山^{さん}取^とと更^{さら}

病床に猫まゐ

江戸中橋牧野乃中書より書く者のおはのみ
金糸の下女に病に何れもなく老く獲
ま枕し傷居る人よりよくおれもけしに
離れし病人よりとひしくり方るに矢に

祖母孫と噺し

上州厩橋より二里ぐり隔て大胡村の名
前大塚七之助より書く者乃母七十金糸より三
歳より孫を抱て昼夜寝るに

出て獲をとりしありて大猫 匹まり
して内より入る獲を大蛇の上へ懸けしに
卵の猫といふ今お納屋町へ踊りしとち
んとあるもいふはけしう獲の類もふく
伽と下へゆきけりか成りしとてをさうへ
ゆ我で信せし事も信のいふくまひもて
叶しとてわくく一本のくは獲ありし
信の件ありしとていふもて立ふ
猫とてお伽ハせぬともふしつて獲
し

まる取へてくけり我もゆきしとて云れ
カバ猫といふもゆき獲又も取らざりしと也

四子と母産す

備後神名郡 神田町 仙や久米とてふ者の妻
四子と産す三子ハ男一子ハ女なり人め
産す一ハ髪をくはし産す一ハ髪を
額に角をとりしとてなすて捨たりし
一ハ髪をくはしとてなすて捨たりし
一ハ和漢をとりしとてなすて捨たりし

矢形いさかの青あお子こ

延宝六年、泉州さういの夷嶋、面三、
 ちちあきあきとすて、至りしと大坂屋
 塙のき君、いふて、法人、いふせ、ゆじ
 つか、夷形の者、いふ、いふ、いふ、いふ、

山伏^{やまふし}子^こ死^しす

信明のりあきより
山田やまだハ多ク集ルト云人知事
至一子も一病くワリシ歟人々思
上巧うまくり親を憂ふゆゑ名ヲ山伏来テ

煩ふ子と引立てちてやじとして互に引あつて
山伏を引こくといひて思はるゝ憂き心にて歎息ハ
するに其子があらずやあると云くし及ひ今猶
のうし子も限りなく煩ふに例のようにならぬ
うへで連中んとすると何れも今度からまど
乃陽力と云くして安んずるに終るよおし
負てゆりて憂さかせたのみうそのおぼけ
平獲てゆくものならハ憂もするに煩ふもの
なりしと云ふ

姫切名劔

毛利元就殿へ陰夜にたふし吉川元春のま
しに跡より元春乃娘あききくは頓く
拔討了切きもれむ足ぐやく近なりし其血を
そいひくえあつて道の途でえて岩穴の中
お入る地と堀あふしてふちに女死してけしまよ
娘と姫切と名づる取持けりして吉川監物
遺物として毛利元千代あへ贈らるる

化生あつて入る

加賀の鉄炮組中村平太夫うよ夜寝るにひど
何者やんまて火と油に寝る上より押へ
驚いて胸より下へあそむけり其苦いさ喻に
いんゆき一起りかんてする其重きり大
磐石として壓るがごとく苦じりあふ及ひ
いふがゆふまゆもはるるぬ又此のる僕
と寝させさるも回く悩むる時お伽
人ときりけり居るる座のひよのまの村の中に
おの影ちりくとしあつて怪しき鉄炮をけり

と仰ておられぬを極く極くづ金やきゝを以て
鳴すべく、飛上りて逝去るなり。其後、
又また、
来りて、

形ち五體ふき妖者

薩州の家中の竹内市助と云者、延宝六年の
あふきて、他ふりて、
てまり、
泣き、
泣き、

てり、又、
額、
通、
や、
泣、
返、
泣、
友、

しく居るなりし時、
 面三尺をうのの大法師、
 ては、
 大とて、
 かくと、
 ぬく、
 か、

性
ふ
あ
て
女
と
な
る

巧タカサキ鑄コウ型カキの息女ノの逢アハ見ミ了シ知チる女メで尋ハね

しふ^ヤ中^{ナカ}法^{ホウ}恩^{オン}寺^ジの内^{ウチ}教^{キョウ}藏^{ゾウ}増^{ゾウ}肝^{カン}賣^{バイ}に^ニて^テも^モハ
局^{キョク}を^ヲかく^{カク}と^ト踊^{マユ}り^リや^ヤ抑^{ヨメ}り^リ歌^{ウタ}乃^ナ及^{ツキ}ても^モお^オー
い^イわ^ワぬ^ヌと^ト断^{ツグ}り^リや^ヤそれ^{ソレ}は^ハび^ビと^ト預^ヨて^テ仕^シへ^ヘて^テお^オい^イ
ま^マ人^ニ息^{ソク}女^メの^ノ部^ブ屋^ヤと^トわ^ワる^ルに^ニ息^{ソク}女^メハ^ハ寝^ネて^テ局^{キョク}
搦^{ニグ}杖^{ジョウ}と^トつ^ツま^マて^テ看^ミあ^アる^ルが^ガ口^{クチ}ハ^ハ耳^{ミミ}の^ノ根^ネま^マて^テま^マれて^テ
耳^{ミミ}と^トま^マして^{して}あ^アる^ルい^イく^クや^ヤん^ンと^トお^オり^リし^シー^ーや^ヤ
若^{ワカ}仕^シえ^エて^テハ^ハ悪^{アク}う^ウう^ウと^ト思^{おも}ひ^ひ鳴^なる^るや^ヤま^マら^ラて^テ
局^{キョク}を^ヲふ^フい^イど^ドー^ーち^チの^ノ子^コ細^こあ^アま^マバ^バ暇^いそ^そろ^ろす^スる^ルや^ヤ
と^トり^リし^シは^ハ三^{さん}思^{おも}い^ひう^うと^トす^スの^ノよ^よう^う今^{いま}俄^いに^にと^とく^く

まてちちく ねづりきりーとや

薄^{うす}稲^{いね}の穂^ほを生^なす

天和三年の秋伏見の幕府 昨^{けつ}マと云ふといふ者ハ
庭^{にわ}の落^{おち}稲^{いね}の穂^ほ生^なーあり人々^{ひと}とて幸^{さい}多^た
乃^なる^ると云セー

壯^{さう}士^し童^{どう}てりて客^{きやく}入^いる

江戸^{えど}板^{いた}所^{じよ}一町目の横^{よこ}吹^ふや町^{まち}了^りて十三番^{じふさんばん}く
る者^{もの}の子^こけ^けハおれうらぶ常盤橋^{とこばんばし}にて中^{なかつ}
小姓^{こせう}と云くー者^{もの}二人は袴^{はかま}と袴^{はかま}山所^{やまじよ}のえんぞ

おれよれもはくばく金^{かね}をあたせしうばあま
袴^{はかま}をけりて今^{いま}おーはこよとて入^いまかられ
やうくひておれやあうんとよ今^{いま}おづーはく
入^いまかられー本^{ほん}庄^{じやう}の家^{いへ}をなまこよおて頼^{たの}て割^{わり}勿^な
と出^いーおれをききと代^{しろ}てききとらあーと泣^な呼^よ
ハ頭^{かしら}をくきとけりてけりてに力^{ちから}なく連^つらねて
なく三日^{さんじつ}経^へておれ^{おれ}の奥^{おく}うり奥^{おく}うりあうて
影^{かげ}ーき家^{いへ}君^{きみ}ありおれ人^{ひと}なり男^{おとこ}の位^ゐちあり
唯^{ただ}朝^{あさ}夕^{ゆふ}ー血^ちのけりる葛^{くわ}籠^{ろう}袋^{ふくろ}ー包^{つつ}みと多^{おほ}

もち運こみ其こねを汲くく云々うんくなくたたられ
りぐき方かたもろくぞれと恐おそくくくくくく
言いふぬぬん三月く成なりて下くだるる男おとこ件けんの童わらわ
女おんなハ不便ふびんのううまゐるゝゝゝゝ地お夏なつ明あくき
女おんなハこれうゝ鼻はなく買かれてちちりなほと鳴なく
くハ今日の言いふふやその教おしの因よりかかれい
進すすむゝゝゝふゆゝていふふ返かへくそくせんや
ずゝゝゝゝ胸むねくゝゝ噪なき言いふて遅おそくマ待まち件けん乃
ふゝゝ隠かくれゝゝなスハけ童わらわ欠か落おくゝゝゝ

進すすむゝゝゝゝな及およく誰たれく二人ふたり候まをふにハ件けんの男おとこ
とけりりゝゝゝゝ云々うんハヤゝゝ教おし入い中にけりゝゝ
本ほんゝゝゝゝゝゝ鯛たい釣つ舟ふね乃なりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
左ひだりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
後のちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
矢やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
矢やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二三軒さうりの者ハ冬の燃上るゝとて安んずる
火のつりあるやとてまじしとてのふとて
その毛とて舌とてゆゑいふなりとて

人活かす 柳となる

勢州二見浦れ近き取らうとていふ浦のり
乃者塩海とて商買してなり都あつたり
何る所系れ稲荷のおうておびく体と若れ
老るる柳一匹出大鳥若とてあつて飛
ありけ者おろろと見ひ見れも若れハ柳

はもこよとてつりし中く我ハかりとて
左のハ我教んとて著るお織とぬぐと縄と長
つとて鳥若の上へおろりつとていふ
その者も飛越るおとて亡とてお本國へ
おろておろりつとて我若のそと敲ちハ妻
子とてきびく立ておもおろりも古柳なり
肉へつとておろりつとて我ハ亭主なり親なりとて
中へつとておろりつとておろりつとて件つとて
おろりつとておろりつとておろりつとて畜生なり

墮ちたるものやとてそれより是非なく去つて
 後君とて藻の鱗などとの食ひとあり
 其後人より託して我子やくゆされ大定りたる栖居
 なるや少く迷惑せしむおぼえすぬいと定められ
 ちぬと口をしるまされと取の者ももとの比名原
 の者のみちれむ一入つれと不便なりけり小き
 祠とてまじく垣間の稲荷と祝ひあるとあり

江戸の久保天来寺門前二日傭と業とす

高野山金剛三昧院の下人三もなるとはあり或
時住持の僧他出たりしに雨風をけりしお下人
ひうひうまるとして抛たをりあうゑ具のこざれ
をひくをとりしに若くはいささきもあへと
一向にすべし程よくや雲は雲よそしやれに
風ぬすじも降くばししるの僧下人ふひひの
方ハ直人ふふはじ隠されなりと云ふ今ハ何ぞ
はくそちん我ハ門前の松と楓とに候く天狗あり
行跡貴く候しや一仕ゆし今ハ寺に

大難ありと云て飛りぬ

真名古村蛇孫髪粘る

紀伊國日高郡真名古村ハ真名古の左近に候く
取ちりあ村ハ蛇の子孫ありとて隣に隣村へ婚
姻と結ぶれど立所のみりハ縁の及ぶるのみなし
其中ハ往古より蛇身の女一人てあつて生るるの
今ハ死してはゆふなり其容貌千人よりすれ
髪ハ女の長よりあつて地と雲と月の墜栗花
ふハ伴の女の髪なり候てあつてあつてあつて

流るもつぎ合て櫛の歯もさし陸栗花はきて
つるの川をてはて忽さやうと成てく
と解るなりけ女八国村にも連値男なきとせ

葬取る雲中の鬼のよと斬とる

松平五左衛門殿は雲の葬れり雷電四方に閃き
龕の上り黒雲やうじとみたり龕よりて掛
うひえんふり怒のふれと成る雲の中
より拾ふすやうと抜うらにうふハは雲にて
雲もきぬ跡とるれを血ねびしく流さう

其中に怖るき凡三つ解の奈り銀はけとす
うへう所の毛生るお切たしうせれうこの
刀と大車切と名つるふおけりしと証書を書き
りて其引出物とせりしと証書を書き強
あら悲しうてけりあるとせ

夜陰茶亭兩首出設す

能勢は向ふまゝ東の首途に松本城おちあへる
きぬりうあふ入てと燭を立て用ひにけり
うへてえんふハ茶やのまじが内火燃しに

るもきく鳴つまゝとてこれと未だの首と鳴る力
首と出ッ入ッすると不審ア一わい子息はあを
呼あれをえんと取りし涙ア異色成るのちやと
別ス入るふア隣みれおとくおと齊一く
内ススしおも佳件の首もくは内にて隈く
まて殺けさるれおや一きおも又いじまめく様
の趣くはめでたうおもえさるへ又おのく一物
狸の石考りくはけさう一時おももてくまぶけやを
ア一いなるゆふらけりんとさうとぬり

灰骸雲ア入り兩足とこれ出ア

寛文七年閏二月六日俄く電ア雷はがアエり
ア一は牛ぬの者死てま田の格霍れ焼場に送る
しに馬雲一けさみ下り籠乃上アヤゆと思へ
灰骸をま中に提あアアあのは足雲れ中へさく
とけりしや法人スけり

茶店の水碗若の面と現ア

天和四年正月ア中川佐渡アおれふねりセー
休一堀田小な多とり人はいくおの白山の茶店に

まう休いーに石の園内といふ者水で飲るが
茶碗の中へ最麗き着物の顔のまゝうば
りせくおひ水ですく又汲み顔のまゝしうば
是非く飲く――と水園内が顔く着えまゝ
盆へ初め色はくしり式部平内といふ者之園内
おろも全く我ハまぐけくじお表の門せハひして
通るまれらむ不審きわたり人ろハあじと
おひ振うちふりれむ迹出さうしと着く追
つらに隣の境まで出てえりしにひー人お合ひ

其由を問ひぬが――とておやとぬ聖晩園内
おんとて人まる誰と問ハ式部平内が使い松岡
平彦是村平六土橋久彦といふ者ありさひようまで
ゆりしものをしりておやとておやとておやとて
いくさや病のまゝ生る湯治――まゝ――まゝ――
おやろんといふ恨とおやろ――とよとよおやろ
ろくけらま形あり園内おやろとておやろとて
まうろくまは述て件乃おやろすてり隣の境に
飛ろろて失ひ――後又とまゝじ

然燈 嵩洞大猫久しく捕

紀州然燈の山陰の洞より虎のくくする獸候て
里乃大狐狸なとて捕るの數にやび人等
追ふれども里人發炮して歩ハ足疾嵩窟小僭
まぬ或者竹の串と輪とを振つて里よりとて
穴のあつて押さへてそれよりやうに倒きて驢
して拾ふ竹竿れどもちやなく五つき
うは大方う聲して鳴るや所もひびきしう人
巧まゝ金歩報しちり猪やとりし大猫とて

けりし身事二もふのりあり

蛇變トて人ふ交り懐胎して初て知

豫州宇和郡後田村の庄や古ち未進のりに分て
一里半隔り城下より来りて心ちび逗留せしに
宿へ入あゝに夫ゆつて女房と目し床に卧ぬ
女いゝめハ其の男ありとちひに後懐胎して
解り懐に係りて蛇来りて守り居るを
人々おちあき追ちてセハ商人それ報すな由り
とていふやや産やちしに縄の糸よりけりて

蛙の子に齊いそ——きぬと一斗いっとうぶく戯あそでぬき
あめ女おんな中なかつ下女げにょふたりしり吾夫わがあやめぬ
となひにままアアのりて蛇へびアアてりしや
ぶく乃のきくくわわわわ畜生ちくせいアア
墮おをんとてとほろとく

吳い形がたの二子ふたごと同産どうさんア

奥州おくしゅう南部なんぶ盛さか盛さか乃の妙泉寺めうせんじの内うちおの百姓ひやくしやうの妻さい
延宝えんぽう八はち乃の夏なつの二子ふたごと産うを人ひとハ形がたの長ながく足あし
やうやうの身みに毛け生はてりるら猿さる猴まけのこ——もハ

目鼻めはなりしてふた足あし四十三本よんじさんぽんなりしやと吳い浪なみあり
そのハ恥はぢとけくセバせ跡あとの考かんがひもく捨すやりして或人あるひと
すいふんとて乳ちと飲のセありアアみ亡な目め終はてスス
アア——

二蛇ふたへび頸くびと海うみと人ひと家うち倒たふスス愛あいず

阿州あしゅうの二宮ふたのみや久美くみと人ひと薩さつ大だいへ使者しやにめありに
日向ひなたのあつてりるら——あやめありに固かたの法はふ令れいく
とて信しんけりしうば考かんがありてりるら一ひとおハの蛇へび系けい
アアも寝ねとてりるらやあやめありとてりるら——怪あやし笑わらひ

安君一にまづき倒れて死す

幽霊袖と泣く

江戸柳原のほや市へ来くふ者其妻天和三の妻
身はくしうまのちの夕暮ふ幽霊のうら
下女が袖をひきしなつたきりやと伏倒し
叫び―驚き人あてふれい絶てり顔
―水とせきぎ呼あんに幸―と蕪屋に
―まの片袖に切てうらましうは不審くて翌の
朝此妻乃塚―詣でふればかの袖石塚乃上に

かゝるものなりしと云

僧尸肉を噉ふ

増上寺塔中より徒水院へ移付此者とはまきり
は俗利髪はいてもまのしう同様の僧髪と利何と
るやあつて既一寸もまきり離して甚く毒
しはり髪をうすむとあらんも口惜とおもひ
前口の肉へみし隠さん―あつた―其の味は
みず―て細くくみりうそれかかめ風味は
も志きく―てあふ入るに堪へず裏なる墓

取^とり^し恐^{おそ}ひ^{おそ}て土^{つち}を^をり^りく^く一^一華^わ一^一尸^し乃^の因^{いん}を
や^やり^り散^{さん}一^一り^りあ^あに^にあ^あひ^ひり^りを^を修^{しゆ}の^の修^{しゆ}墓^ぼ
不^ふの^の荒^わ一^一り^りを^を訝^{ぎや}り^り一^一束^{さん}は^は又^{また}す^すて^てう^うひ^ひえ^えに
難^{なん}て^て素^そぜ^ぜ一^一狐^こ犬^{けん}の^の不^ふ為^ゐる^るハ^ハ何^{なん}と^と同^{どう}者^{しや}乃^の修^{しゆ}
る^るハ^ハ興^きさ^さ先^{せん}肝^{かん}ひ^ひて^てひ^ひを^をや^やり^り被^{おほ}傷^{きやう}で^で招^{まね}き^きあ^あく
乃^のの^の修^{しゆ}ら^らく^くに^に傷^{きやう}細^{さい}で^で流^{なが}く^くし^しま^まハ^ハ我^{われ}い^いる^る者^{しや}
殃^{やう}り^りや^やい^いり^りを^を探^{たん}一^一り^りと^と余^あに^に堪^{かん}え^えか^かく^くハ
い^いと^とく^くと^と戦^{せん}悔^{かい}一^一り^りハ^ハ人^{ひと}中^{ちゆう}の^の交^{かう}も^もい^いち^ちん^んと^と
ワ^ワく^く暇^{いふ}で^でい^いち^ちり^りし^しと^と也^やえ^え後^ごも^も申^{まを}必^{かならず}る^るら^らう

土家内^{どけい}に^に墮^だ

大坂^{おおさか}立^{たち}賣^{うり}堀^{ほり}中^{ちゆう}橋^{はし}所^{しよ}一^一如^{ごと}き^き宇^うと^と氣^きと^とい^いふ^ふ者^{しや}の^の借^か店^{てん}了^{りやう}
檜^{ひの}物^{もの}屋^や所^{しよ}承^{しょう}應^{おう}中^{ちゆう}乃^の何^{なん}れ^れの^の堀^{ほり}中^{ちゆう}何^{なん}れ^れの^の震^{しん}動^{どう}
あ^あも^もく^く一^一り^りと^と後^ごは^は土^{つち}も^もあ^あり^り一^一き^き土^{つち}二^に千^{せん}石^{せき}引^ひ何^{なん}れ^れ
り^りり^りと^と臺^{たい}不^ふの^の中^{ちゆう}に^に涌^い出^でる^る人^{ひと}々^々あ^ある^る裏^{うら}れ^れる
空地^{くうち}一^一り^りと^とあ^ある^る一^一が^が又^{また}何^{なん}れ^れに^にた^たの^のう^うき^きり^りと^と現^{げん}
一^一り^りと^とや^やあ^あり^り一^一種^{しゆ}ハ^ハ天^{てん}井^{せい}の^のあ^あり^りと^とし^しつ
粉^{こな}土^{つち}あ^あり^り一^一お^お店^{てん}と^と變^{へん}の^のあ^あり^りし^しが^がち^ちあ^ある^る布^ふ衣^いれ^れ
く^くく^くる^るお^おつ^つ何^{なん}れ^れと^とあ^ある^ると^とあ^ある^ると^と檢^{けん}也^やの^の屋^や後^ご

妬女鬼となる

江戸中様より、お姫様を、さして、妻の夫と妬む
るの積りて、いよいよ煩ひ、目に、お姫様へ、
へきね、すゝく、うば、夫も、側と、離れ、ず、る、君
あり、おの、り、ちりし、病、人、險、く、起、つ、ま、り、
腰、を、や、と、云、も、い、に、双、の、指、を、口、に、入、し、く、れ、
耳、の、根、を、割、き、ち、て、掬、め、と、成、を、乱、
夫、と、飛、や、い、ち、と、お、り、う、さ、ん、と、い、ひ、お、り、と、投、
じ、ず、と、紐、う、れ、や、者、た、と、い、ふ、と、い、れ、ハ、下、人、も

隣の者も走りよるおの地蒲団までふく
おきせ老人おさうきとて出で終る
推殺してありけりおの地と取れり乃
しとせやうあれども深き長提了りて
寺にわたりしと也これより夫もくひん
煩ひ一ふ百日をわたりて後了りあり
僧の建礼と食よりと成ておとやく

いふ乃雜司公の名を子とて人りし嫡子ハ出家
了て真言宗の學子通たりけりおに盗入て修め

と殺害し其跡に多の金銀財宝とりして代名計
ひとて俗縁の兄弟を散りてさうせり
つ朝弟が馬屋の内悉く火にまりて娘入る
親了告驚きふれども軒に炎のりて焼
失してり其次の弟が家了ハ急火の玉とい
火のりて隠れり跡ぎ思まば壁の間より燃ゆる
るまをばりおのちりハ丸度りしがはわん
かのかりて又焼く一又次の弟が家にも
火の玉といひてさうゆりよの内で燃ゆる

ありあけにまゝに 兎やせん 角やせん とて 何うに
 至りし 神祇佛院に 願を立て かの傍の跡を
 念ふるに 吊るうば 終る 恙なく 終りし 寛文
 元禄のころ 被傍 財宝に 甚しく 執念をもち
 まゝに 一念の火災と なり かく災に 罹りし ところ
 人に かなしむ ところ

持より居てとせしむる餘りなれどもさふ
 寺より少油よりぬちと贈まは頓て賣て代り
 なすや人とちりて争で角ハもらねと向ハもさ
 きハハぬ也出令りやねれと差へしはてな
 けの者の者ハ朝夕も春菜れめんといとせしむ
 於ふちりしと食セヤき迄の外ハ自分にも食セ
 かく辛くやまでもゆと定め令せりしは是非
 ちりきまのりはと免しかくむやう悟くちり経に
 富限りちり銀二十也月箱と寺の土蔵ふりちり

と其志のいふはきで長老も笑止るなり
時ニ教化せしむるも佛に成るなり
病むやうもあらうなり
一さやうがうなり
一は養生の方とて妻子を
引はきまにひて看るに朝より夕まで
また隣りとも唯土藏のやうて居て口を
何の内乃金とすてく死すへきかと涙とら
けき死するも供佛に成るなり
一金箱と玉とて云ふ一の既る一縁縁にを
て枕えりて死すなり

て枕えりて死すなり
歩くと長老は死す包と念佛と書て川へ流さ
きてせしむる縁縁とすむきども耳にも
とて只金と玉とて云ふ一の既る一縁縁にを
は流さるる裸とて死すなり
うて腰と玉とて云ふ一の既る一縁縁にを
つて悪人の自他懺悔のありとて縁縁にを
時と流さるる親とて云ふ一の既る一縁縁にを
止見鐘と云ふ

洛陽寺町通松原下町に飾屋九条と云ふ者乃
引つゝひる玉と云ふ女あり生國の若狭の者あり
四五ヶ月もまゝ公儀と云ふにあらく衣類などお
りる人にも公儀にあらくおひつる時病にあら
細くおひつる父ありと云ふ成るが秋より
外路吊るべき人もなりんむい通る常樂寺に
位牌と立忌日とに供養と云ふと云ふ志願
て何れもせうゆと云ふしひりかみ百
目下の浪と用事と云ふと云ふあらむ人も下賤

おととして奇特なる志と云ふとて隠れぬおのま
二番此位牌と云ふ資堂料と云ふ浪と目むめぬ
おと浪と云ふ人の妻と云ふおと云ふと云ふ
おと云ふおと云ふおと云ふおと云ふおと云ふ
の四と伯母ありし者のおと云ふと云ふと云ふ
おと云ふおと云ふおと云ふおと云ふおと云ふ
主人のおと云ふおと云ふおと云ふおと云ふ
おと云ふおと云ふおと云ふおと云ふおと云ふ
おと云ふおと云ふおと云ふおと云ふおと云ふ

うらもいときハ大なる蠅一ツ飛来りぬ氣丈婦が
あつたもの飛来りあれども行くはく痛きぬ
やうに捕へて他へいふち方に中二日寝すまで
飯もあれどおそれての裏なる言はれ川の所へ
放しあるに又飯をぬけたる家の者の者もこれ
玉に虫鬼あつて口ずくもあれども人もあつた
ふにあらひはあつていふとておれで少くあつて
取と隔て放し方にいけ蠅又飯りあつたあつた
不思議さうあつていふとて紅くあつてあつた
あつた

あつて印きへいへて又飯もあれども今ハ夫婦の
者もあつてあつてあつてあつてあつてあつて
一銀のものとあつてあつてあつてあつてあつて
市ハ進出りあつてあつてあつてあつてあつて
いへせんと思ふとあつてあつてあつてあつて
者のあつてあつてあつてあつてあつてあつて
のあつてあつてあつてあつてあつてあつて
日は飯依りあつてあつてあつてあつてあつて
上人とあつてあつてあつてあつてあつてあつて

慈明上人といふ寺へ移さぬまゝとるわ子細と具
アヤとて二月廿九日ぬき衆が弟勤を度つア
くも幸四日ハ四午ぬ日アアアアあれむき今
海いそとて中流アアアアア今もて要海ア
アア蠅何とてア目アアアア自滅アアアバ
これ一日アアアアアア奇美の好いア
これとも箱アアア通西軒へアアアア
アアハ律師もアアアアアア蠅み加持
土砂アアアアアア飛蹴鬼アアアア

修一右乃信施ハ永いの資堂にのしきあり
瑞光寺の上人ハハ法アアアア乃親切あれ
あの蠅アアアアアア供アアアアアア
淨人惠雲法師アアアアアア妙典ハ油
讀誦アアアアア山上ハ法乃アアアア
率都婆アアアアア又回向のみアアア
アアアアアアの臨アアアア細きアア
上人も不思議アアアアアア理アア
アアアアアアアアアア大徳の追アア

後娘のわが家と執る

浴一糸了備後といふ系人の子に左中といふ
者あり継母の腹より娘三人ありしが母に謂へ
らく左中といふれは跡ハ二人の娘ありと
嫉しに母煩てぬれ三日や左中ハ継母
のまよりぬへるいふて絶めて終り一子あり
又三日や左中ハ妻よりいけやまをさしや
姑の縄を以て我首と云ふんとすといふらん
情や堪やと叫しと其伯父なる五條の

宗仙寺の東堂血脈を譲へ姑の嫁よりたさきと市
りしはまもすといふ病にころくありし

新著聞集

冤鬼篇 第十二

幽影屢所^{いんえい}りれ^る數人^{すうじん}あ^あく^く、見^みる

炊芥茅^{くわいけ}と^と生^なく^く、菊寺^{きくじ}懸^か燈^{とう}

息女^{いきむすめ}い^いく^く、幽像^{ゆうざう}と^と又^{また}忽^{たち}ち^ちあ^あす

怨念^{えんねん}と^と戦^{せん}ひ^ひ平^{へい}て^て脊^せの上^{のうへ}に^に被^ふれ^る疵^{きず}

夫^そ妬妻^{どさい}の怨影^{えんえい}と^と又^{また}て^てほ^ほわ^わる^るあ^あす

灰^{はい}尸^し人^{ひと}に^につ^つわ^わる^る念^{ねん}と^と告^つぐ

勇士^{ゆうし}の亡^な鬼^き倭人^{わじん}の^のく^くま^まと^と恨^{うら}む

亡妻妾を現下

泣き喉で

先夫招呼はわに成す

先妻とていふ

恨る婦錠くたる潜妻家と去る

結子母了還ひ恨霊子と憎す

妻の意進来り國了眠る

幽影屢何れ数人悉く見る

久保吉左衛門殿はの兄小姓はきてもなき科了

殺害せりけりなむと母はきてもなき科了のそで

かたごまのゆに及ふべきかたと思ひ口説ふの恨

ぞとて思ひあつとんと嘆り言ふ科了すき師

かりき後かの少姓が幽霊何れいそやうな人

目了るきりば男女ともきり恐まあつとけるに

嫡子末馬殿いそりやうに件の幽霊毎夜出

て夜伽の多く居る中きり通るきり捕へんとす

まば雲烟のくくはてはるせぬ人々肺を冷しあり
佛神と一向了新王に譲りてや庭にゆく使
りしうと出羽の出るよりハ様やまけりしとあり
然るく三よそで公卿の沖制れり自らの管
とくへ一科より其のハ越後乃長尾景隆
後河原より出羽より息求馬殿ハ奥州棚倉
内倉化修より出羽より出羽より家よりハ
件のそれるやとそく

妙芥子と生一菊寺懸燈

小畑孫市殿奥より右はの菊とふ女ハ膝部ハ
ぬきりしうと出羽より出羽より家よりハ
とくへ一飯椀の中より針のきしと奥よりハ
大きく怒りきありて日暮しのに頼みなりハ
自らと頼みハ已に海にけりんそやるねとありき
巧き一増しより一髪をけりしと立て座の井
筒より落し入きて頼みなりとけりぬと家
よりしついでとけりぬとけりぬと妙芥子と井
の端よりけりぬと菊よ着いあてりありハや左

ちくハ今前更の妙多と生て見せよけ恨で返
らんとして井の傍うに府立れむしきやけあふ
るるうらに悉く生出さう奥もこれとるぬひて
憎きもさぶや秋でのういさそぬも又井の底に
落しそ報さるゝまどうあ人が悲哭けり
しき出て孫市女夫婦で初めりの親類れやう
あふろぬ報しきう諸尊に祝願し大は
秘法と修しちれと更ろ験りてあふのけに
甲州の知りあふり菟寺とて一字建まらぬひ

さくろり吊ひたりしやと程もいづりし人
そこの彼寺ろ灯多くかきぬ病人死すべし
まハ飯力湯と乞て湯桶ろ二三口吞平て忽ち
死すろあうそれくも同しき也詮あうて
出家しぬひしもさしやど逃まやうてあふの
一そあもくく滅い果し今ハ他家うろ名跡や
ほがさぬひしき

息女ひしき幽像やろ忽ち死す
戸川肥後ちあめの四五歳の息女の乳母と料理人

と密通のやうにやうにやりくりと討せ又乳母
と叫出らるゝかいつなるあつてかゝうといひも
果す所の血とすて至天井より吐くも一息で道
一とて討つてあゝぬりゝまゐるゝあ人の出立
只息女が目了のゝとくゝ一あ母の後殿息女
とそい庭の比のやうにまゝとあふゝ又乳母がま
るハむと泣くやと喚伏し倒れ失ふぬいぬと
泣くやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
殿綿帳をひいて涙ぬりゝに只何となくあ

も立ちすゝ海へつゝあれをいそがし聞て出て別の間
了隠れ居てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
戸をぬき件の夫婦山よりあふゝ伴いまゝゝゝ
いれるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
綿帳の四角と切りぬきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
誰とや夫婦の者ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

怨念と戦ひつゝ脊上に被れ疵

岩城忠次郎殿家来阿弥陀寺隼人といふ者を

故よりして人なり討ちたりやのち討手にむい
— 越友で誘て松原より取入湯に入ると時
とひ— けふのちのち塚ありけきなる人
ち— 也む— 討手— けり— けきけり
塚のち— けり— けり— けり— 馬上より飛ち
心けり— 刀で抜き何系世— けり— 時
討— けり— けり— けり— けり—
連の人ねどろき— けり— けり— けり—
— けり— けり— けり— けり— けり—
— けり— けり— けり— けり— けり—

さうに獲て曰ふ今け塚より隼人けりけり互
了切けり— 我ハ背と切き— けり— けり—
黒血凍て基ぶ痛き— けり— けり— けり—
ち— けり—

支那妻の怨影をえて終へたり

伊井掃部頭殿の家臣西に伊豫の内室嫉妬
— けり— けり— けり— けり— けり—
けのけり— けり— けり— けり— けり—
けり— けり— けり— けり— けり—

大坂陣了知せりしに――勇士了ていふ天魔
せし橋んとおしり――勢うれをぬき来るといふ
くみ膝うへ目くらめき笑ふびアツトよて俯伏
了成り――何れ甘きおれは来りて居るに件の如
見――はまふの云く士の妻もく人へのく
うき婆やとせしるよりいふ世に終るといふ掛
らり――は振えりていふと笑ひ――是れは
件のよりハヤミ――かど候様やとほき終り果し
ま――是れはあまハ軍法の達人なりと人々感ぜり

火尸人下附て念と告

松平土佐守殿はるの上屋敷のりる長や下候ハ
きりすお或ハ火する人もあり夫れは多くいふ
おしり――も部屋にありしは詮さうてお山
喜三郎といふ人候――が家来了ておつてきく
口――も我ハ國は十たあを妻なり夫のりは科
て刑罰了値――りるまバがな――自ハ女のりる
何れ子細ともきりし者と同罪了たこらひ
きりし候了頸を斬了けしぬき磐石に上り

とくきく苦くさくすくけ新屋く柄人
く恨くハなれども我苦患の氣上りの物く
かく慍くもきまふやー哀を願ハ死骸とにけ
出ー端で吊いたまわれとさあーと泣きり
やの十あはいらる者どく家中れ上下でまふ
まふりー門番の隠者半所りの老く是
とけけの者ハ元和中に糸拂の役して和欲
のうりて夫婦より一音と例らと死骸ハそれ
部屋の下ーくくーマふふく地上久美

く目付下知く天和二年六月廿一日に部屋乃
根本で放ちけくせあれと素より大石けしと
引の事くこれと髑髏二つり一ツハ女の死骸長く
生てきもけけけけけけけけけけけけけけ
かの地所ハ一町ぐく備てきーにやけくとさ笑ひ
只今我尸をくくくくくくくくくくくくく
誰の回向くくくくくく問ハ増上寺の祐天和尚
の引替くくくくくくくくくくくくくく問
せありー去知識けりて二人の尸でけくくく

貴き吊ひつてよろまけ給へし 拙人何のゆく
くならま

勇士の亡魂傷人の罪と恨む

下總岩ヶ崎の城主を居る所を伏見筆城乃時
家来の原川孫平次ハいしき武勇にて取りし
終に落城の時討死しありとや子息左京を
奥州岩城へ今もつりしにやあるおのゆがう
孫平次が死に定て花やうらん一卯のふり
いにもやうしに候きまをうとふ人のい

そく殿のふむ程のふりあるは定て薩摩など
と向て死にやうと朝り笑て居るひく
嫡登之助親を候へし親とて見え我
誰より原川孫平次より某武道ハ日ま
殿のおりて候る挨拶堪忍うがうに女を
う教さんへえい者と教へおろいさんと
口ぐらふをあたふたふたふた某誤り
極まりとよと挨拶言へしおれは日蓮
仇の大法寺とふれきうばめ眼といふ

いふ上人はくは事言はば其のハ
不和なりしやと自づ全縁なりとて
所を白米二俵おろしに及ぶる士
はくは件の新とてさうなぐ位牌
やうに控へ一飯と備へば誦經
とて新とて穀物とて芦毛馬と
買求責はふや
邦歟不遠のその新とてさうなぐ
佛意とてさうなぐ
今よふまじひはくは返答せし
も上
大きく面目とてさうなぐ
登る

或は多きとておめとて
皆乱心とて
とて

亡妻決て現す

京都の狂言役者古今新左衛門ハ
はくは都の役者とて
そのゆゑとて妻を引具
都の役者とて
はくは好きのほく
きく乱れ
親とてのつとに子三人
やとてはくは妹あり
遠離れあれと妻を念や
やと思ふ
はくは終つてあり
はくは元禄十年

八月中旬新参大坂引越んとて用意し先
立て同職の者伏見の所合了参下しし
おの妻も同職ありやの者も歟せし人の所し
最うぎと思ひなぐらふお酒一頓て大坂
了はん定しき件の下ぐ何代へり後
余の同職の者も大うとて肝とひやあり
甚者なりいはいすとて新参よりせえん
とて京都へりてあり其の所より
参へり新参の所に發禁して参る人
とて

活霊咽と占

江戸靈巖嶋は棚を家のお出右衆
とてふ者ありて同一家の店とて
大坂より猶子と呼下りある其者ハ利根
ありて高きとてやがていへり煩とて
も不審なりといふ者ありて何れも
あるものなりや維新全浪やいふも
何れもいふもあれとてやがていへり
我よりいふに依りて家に書きたる

誰れぞ寐入んとそれぞ咽とぞ先きくふろ
ひるやとけりあれど亡き糸ねとるき卒にけり
女の徳慕いそへりもろじいれ子細きべり
いそへりその曲と糸糸告るれく大肝とけり
書とくびくゆりろいそへりその曲にや包
けりと責しそは妻をそへり今ハ何ぞ隠さん
あの者ハ商くそとけり利安がそへり
家とろくろバ初まハ不調法とあれとけり
仕負家とそへりれんとそへり口惜きそへり
けり

とけり一念ぐそへりそへりれと夫とけりハ此の外の
僻とろくろく心とけりそへり亡き糸とハ店とけり
そへりそへりそへりハ心と翻すべりそへり
そのけりそへり家とけりて店とそへり
病もハ扶とけり

先夫招呼はけり刻す

けり城町とけり鼓歩と糸糸といふ者の書
ハ風と屋の女とけりしとけり曲とけりい
と糸糸といふとけり内とけり糸糸といふとけり

後つと何ぐきりて睦——くす——はきりきり
どつと志——やと候いて候る身何し候て
もつとあれど人々のいふに連れあつて新田
郷町の屋敷をきりて者のかつと嫁——きりてきり
三回忌のけききりしとて妻返るきりて候る
不ふとあつていふとあつて候るきりて候る
きりて候るきりて候るきりて候る
問ハ候るハ候るきりて候るきりて候る
候るきりて候るきりて候るきりて候る

——候も胸——候も大勢に候る
いひて三日あつて候る——寛文の中のもの

先妻と云ふといふ

常州の候るきりて候るきりて候る
武夫の候るきりて候るきりて候る
きりて候るきりて候るきりて候る
國の候るきりて候るきりて候る
候るきりて候るきりて候るきりて候る
候るきりて候るきりて候るきりて候る
候るきりて候るきりて候るきりて候る

焰^{かみど}りへつづきとせめてハ今一といふまで恨^{うら}でもうまん
とて女の身と一と数^{いく}づくの山川と入^い事^{こと}う一とせ
保菴^{かあん}もくは所^{ところ}もろくおひいさくく一と辞^{ことば}と結^{むす}て
とて一とねひもろく眼^めの状^{よう}をおろくお海^{うみ}へ
あえへ飯^いく一とあり後の書^{かき}し子^こ三^{さん}へまで説^とくやと
とて一と宜^{よろ}く一とろく浪^{なみ}ろて成^{なり}ちれを保菴^{かあん}へ
かの嫉妬^{しど}の所^{ところ}おにやと心^{こころ}ぞろくちろくおろくに
あえの書^{かき}おのろくおのろくでさひ煩^{わづら}て、身^みはろくしと
告^かしうは所^{ところ}もろく不便^{ふべん}のろくにて独^{ひとり}隙^{ひま}でさんく西^{にし}え

へ越^こせめてハ無^む訴^そのきろくに替^かて一とんのまめやと
て家中^{うちゅう}の一とあふさひて塚^{つか}下^{した}より二里^{にり}むろく隔^へて
いる寺^{てら}まで一とかの墓^{はか}おろて新^{あらた}んろくに吊^つろく
一に不^ふ思^しぎや怪^{あや}ろ固^{かた}せを一と石^{いし}の率^{そつ}兎^う婆^ば俄^{たち}ろ
折^お倒^{たふ}き大^{だい}地^ち音^{おと}まで一とろく破^やろくと美^みろくやいろ
保菴^{かあん}影^{かげ}をろくろてアサくろくろく結^{むす}ておと替^かるぞ
女^{おんな}でいろ一とまへまろくおろくおろくおろくおろく
まへまろてまき痛^{いた}ろくろくおろくおろくおろくおろく
まへくろおろくおろくおろくおろくおろくおろくおろくおろく

久く家へ入るとして涙き今うへへと家の内を
その形をばりし平久日ごとくひびくきき
おいて至く女と呼へしに聖朝女進へし
とて言ふしとて度くししは定ておもひ
きりもまゐるにやとつて

継子母うさうい恨霊子と憎す

下野那須野の内下畦田村の助八といふ者父は
て継母のつらにほく不孝なり母のいづく
は今ののくふせき目へて進すとも物へ

教いなりを煩ておひきとんと睨く其の恐
うしそにとも母うかつて候りて候りて
毎夜出まゐりて憎せあらねど候りて
つらうとみえりて後うハ妻とてすて候りて
湯釜山の行人うとて彼が菩提を吊いあらね
うとて出まゐるもくばりしとて

妻の薨進まうて國へ候る

伊豫國宇和郡伊達宮内殿鞍うとて
はる妻をばりて後三十日をうとて

じふくまゝうりお書の幽霊事う咽うう
 ちあちあうり日ま勇ちる者なりしが氣力つれそ
 中國の海う序く願ひ関船のききううにきて心な
 事ううに件の幽霊眼あううてそと我でうそ
 下向うもふを我ハいふう用そそむそなりう今
 街う事うしとよ陰人の取うハ入らざりしや
 何となく上う押すにむかし主者國に送しに
 時く其の事う終うわ教うそちうと也